

論説

世界の声に耳をかたむけて

ニック・シェパード

要旨

世界的な分野に関わる在地の考古学者として、私たちはどのようにして自らを位置づけていくのか。私たち考古学者は、国境、大陸、赤道、そして社会的階級を越えて対話や議論を行う学者・専門家・活動家の世界規模の団体に所属する。その一方で、私たちは国家や組織の帰属によって特殊で地域的なコンテキストにも位置づけられる。ただし、その国家や組織の帰属自体が、北と南、西洋と非西洋、経済成長の高低、主流民族と少数民族など、世界を分かつ断層線や溝に関わってさまざまに位置づけられている。このように挿し挟まれるものの多様な形はしばしば、私たちが考古学を実践したり、情報源やネットワークへアクセスしたりする時に、鍵となる決定的な役割を果たす。組織としてのWACがもつ強みの一つに、私たちが考古学者として位置づけられるさまざまな方面に敏感であって、それに取り組む方法について創造的に考えをめぐらしている点が挙げられる。この実践例の一つがWACのリスト提供で、このリストは、登録者が魅力を感じる事柄について、世界から広く情報を得る場所となっている。Archaeologiesは、装丁と出版社が新しくなった！共同編集者であるアン・パイバーンと私は、Archaeologiesがスプリング出版に移行したことを、喜びをもって告げよう。この移行は、WAC会員に多くの利益をもたらすであろうし、この雑誌を学術雑誌の主流へ押し上げるものである。

論文

明らかに政治的な環境下での遺産論：論評

リン・スウォーツ・ドッド

要旨

明らかに政治的な環境下で行われる考古学は、考古学者がその瞬間にも、あるいは恒久的にもコントロールする立場とされない状況やデータを創り出す。この論評では、5つの多様で明確な事例について検証する。この事例は、Archaeologiesの2.2巻と3.1巻に現れ、考古学者にとっての倫理的負担を創りだし、加えて考古学者以外の人々にとって課されるかもしれない、危険ですらある状況をも創り出し得る根本的原理を明らかにするものである。これらの事例には、考古学的遺産の管理・運用の必要性と不十分さ、遺産のマイナス評価、潜在的な遺産資料との関連付けの制限、地域の経済的・政治的・社会的要求に対する考古学的調査の目的とのバランス、そして考古学的に明らかにされた社会が複雑に国境を越えている実態（さらに、この実態は現代のコンテキストにおいて遺産の所属を複雑にする）、といったことなどが挙げられる。活動家の取り決めやその結果が、私たち考古学者の実践であろうと意図であろうと、考古学の生み出したものに、価値づけのされないものはないのである。

チリにおける地域アイデンティティ政策の再構築

ダニエラ・ジョフレ・P

要旨

現在、考古学が物質文化やエスニックグループに基づく社会アイデンティティをどのように再構築してきたかについての問題が研究されている。近年チリ北部のタラパカ地方に住む先住民の中には、生来の権利とアンデスの最初の国という正当性を認めるように主張している。チリ政府によって整備されてきた既存の法とプログラムの利用によって、先住民は組織された地域コミュニティとして彼ら自身再評価されてきた。彼らの主張は、科学的見識の生産と再生産の中の考古学的実践と土地・水域・文化遺産といった財産の社会的影響について問題を投げかけている。ラテンアメリカの社会的コンテクストの中では、考古学は時折、政治的役割を避け、その結果他者のうえに特定の歴史を容認してきた。社会科学として、この研究では、時々政治的に疎外と修正がなされ、割り当てられた考古学的研究に基づいたアイデンティティのインパクトを評価することが必要であり、これは現在正当化されている過去の新たな表象を創造するためである。さらに本論では、チリのアイマラ族に焦点をあてアイデンティティの政策と領有戦略の正当性について議論を進める。

キーワード：南アメリカ考古学、地域アイデンティティ、エスニシティ、アイマラ族、テラパカ、チリ

グアテマラの考古遺産：Iximche' 遺跡の在地的視点

ラース・フリユソルゲ

グアテマラの遺跡の地域的視点はほとんど知られていないままである。本論では、事例研究から、高地に立地するIximche' 遺跡とTecpan 遺跡間にある複雑な関係を示す。このIximche' 遺跡はその地域にとっての経済的重要性はほぼ皆無であるが、社会的宗教的相互関係という異なる性質をもつ場所として役割が導き出せる。この場所のスピリチュアルな関係の痕跡は植民地時代にさかのぼることができ、今日グアテマラのマヤの人々は儀礼を行うためにIximche' へ赴く。この場所は地元の人々、すべてのマヤの運動家、地域共同体自体にとってのアイデンティティ構築の中心にもなってきた。Iximche' 遺跡は集合的記憶の構築の再構築に重要な意味を持っており、その集合的記憶は、考古学者やキリスト教教会、国家政府、マヤの活動家のような影響力のある他者の考えも含まれている。

最初に来たのは誰？スロヴァキアとハンガリーの考古学と歴史学におけるナショナリズム

エドゥアルド・クレコヴィク

要旨

スロヴァキア人とハンガリー人（マジャール人）は、1918年まで約1000年の間同じ国家で暮らしてきた。現在、異なる国で研究している考古学者と歴史学者は、異なる問題に取り組んでおり、過去についてのまったく異なる解釈を提示している。問題になっているのは、スラヴ人とマジャール人がドナウ川中流域にいつやってきたかということである。一般的にはスラヴ人がこの地域に来てから350年後にマジャール人が到来したと考えられているが、数人のハンガリー人学者は、マジャール人とフン人の関係につい

て、いわゆる祖国の「二重居住」を強調する。このようにして、スロヴァキア考古学の文献には、4世紀（あるいはそれ以前）にはすでに、すなわちフン人より早く、スロヴァキアの領域にスラヴ人が「存在」していたことを巡る議論がみられる。この論文では、ハンガリーとスロヴァキアの両極を示すいくつかの理論の事例を批判的に検討し、こうした対立的解釈の概念的ルーツを考察する。

フォーラム

世界考古学会議についての西アフリカの視座：挑戦と願望

C. A. フォロルンソ

要旨

本論文は、西アフリカ地域が、いかに世界考古学会議形成の初期段階にかかわってきたかを検討する。とくに、1983年にナイアガラで開催された第9回先史学および関連科学パンアフリカ会議をめぐるできごとについて述べる。その会合の総会で、南アフリカのアパルトヘイトの問題が提起された。そこで、アパルトヘイトを非難し、南アフリカの組織との接触をすべて停止することと、南アフリカとのつながりをもっている研究者や組織に対する厳しい非難を呼びかける決議が採択された。これが後の、世界考古学会議の南アフリカに対するアプローチの核となり、サザンプトン会議で採択されたのである。これから先のことを考えると、西アフリカ考古学には大きな障害が残っており、その多くは構造的な問題である。懲罰的なビザ取得の必要条件、通貨危機に資源不足などがみな西アフリカの研究者をグローバルな学術研究に参加することを妨げている。